

■ 原著

理学療法を積極的に取り組んでいる障がいを有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を探求する
— 解釈学的現象学的分析による事例研究 —

Exploring Motivation of a Patient with Traction Lesion of the Brachial Plexus Actively Working on Physical Therapy

— A Case Study Based on Interpretative Phenomenological Analysis —

喜多一馬¹⁾, 池田耕二²⁾, 仲渡一美³⁾

Kazuma Kita, RPT¹⁾, Koji Ikeda, RPT, PhD²⁾, Kazumi Nakato, PhD³⁾

1) 北大阪ほうせんか病院 リハビリテーション技術科

大阪府茨木市室山 1-2-2 (〒567-0052)

TEL: : 072-643-6921 Fax : 072-641-4604

E-mail : kitakazuma@gmail.com

2) 奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション科

3) 大阪行岡医療大学 医療学部 理学療法学科

1) Department of Rehabilitation, North Osaka Housenka Hospital

1-2-2 Muroyama, Ibaraki-shi, Osaka 567-0052, Japan

TEL +81 72-643-6921

2) Department of Rehabilitation, Faculty of Health Sciences, Naragakuen University

3) Department of Physical Therapy, Faculty of Health Science, Osaka Yukioka College of Health Science

保健医療学雑誌 10 (2): 79-91, 2019. 受付日 2018年6月25日 受理日 2019年3月22日

JAHS 10 (2): 79-91, 2019. Submitted June 25, 2018. Accepted Mar. 22, 2019.

ABSTRACT: The purpose of this research is to obtain knowledges of promoting a motivation of a patient with disabilities in the prime of his life. The subject is an inpatient (a 40-year-old man) working on physical therapy actively and voluntarily. The method is based on the interpretative phenomenological analysis. We interviewed him about the reasons for his active and voluntary working on physical therapy, and analyzed the data from the perspective of his motivation. The results suggested nine points of view on his motivation: therapy for a limited period of a half year, the presence of family and wife, pride as a man, the ability to change pain into motivation, his relationship to people involved in his hospitalization and so on. We conclude that it is important to take such factors into consideration as therapists' appropriate talking to patients, consideration for their feelings and adaptation to each situation in enhancing patients' motivation.

Key words: physical therapy, motivation, Interpretative phenomenological analysis

要旨： 本研究の目的は、障がいをもった働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を向上させるための知見を得ることである。対象は、理学療法に積極的かつ意欲的に取り組んでいる40歳代の男性入院患者である。方法は解釈学的現象学的分析とし、手順としては、本患者に半構造化面接を行い、理学療法を積極的かつ意欲的に取り組める理由について聞きとり、理学療法への取り組みに対する意欲を分析した。結果は、本患者の理学療法への取り組みに対する意欲を9つのテーマから解釈することができた。テーマは、半年限定、家族や妻の存在、男のプライド、苦痛を意欲に変化させる力、関係性から構成される意欲等が示された。我々は、これらに着目した理学療法実践時の声かけや配慮、工夫が理学療法への取り組みに対する意欲の向上に大切になると結論づけた。

キーワード： 理学療法、意欲、解釈学的現象学的分析

はじめに

理学療法対象患者の意欲は、良好なりハビリテーションの帰結に重要とされている¹⁾。そのため、理学療法士は患者に対して能動的な行動を促す指導や心理的配慮、工夫等を行い、患者の意欲の向上に努める。そのなかの一つに患者への声かけがある。励ましや共感、賞賛といった肯定的な声かけは意欲を向上させるが、押し付けや否定的な声かけは意欲を低下させるといわれている²⁾。また、我々の研究では同じ意味合いの声かけでも、肯定的な言い回しは否定的な言い回しよりも患者の意欲を向上させることが示唆されており³⁾、声かけひとつとっても方法によって効果は違うことが明らかとなっている。実際の現場でも、全ての患者に常に様な効果が得られるわけではなく、患者の状態や声かけのタイミング、社会的文脈等によって効果は違っている。それゆえ、現場では患者の意欲の向上は難しい大きな課題の一つとなっている。

現在、意欲に対する量的な評価尺度は散見できるが⁴⁻⁶⁾、意欲の量的な評価だけでは効果的な介入方法の開発は難しい。なぜなら、個々の患者で意欲の立ち現れ方は異なり、意欲を構成するものも違うと考えられるからである。そのため、意欲の向上を図るためには、個々の患者が障がいをどのように体験し、治療や社会復帰等に対する意欲をどのように生成、構成しているかを理解することが大切となる。すなわち、患者の意欲を質的に解釈することが大切になるといえる。しかし、理学療法領域においては、意欲を探求し、解釈するような質的研究は少なく、また、意欲に関連した報告は量的研究が多い⁷⁻¹¹⁾といえる。近年の理学療法対象者の考えや価値観、背景は実に多様になってきており、今後は、患者の意欲の質的な分析は欠かせないと考えられる。

一方、働き盛りの者が疾病や事故により大きな

障がいを有したとき、障害受容、職業復帰、生活の再構築等、患者や家族等にかかる身体、心理、経済的負担は極めて大きいと考えられる。そのため、障がいを有した患者は生活や職業復帰等に対する意欲を失い、抑うつ状態等になるケースは少なくない。ここに理学療法時においてケアや支援を行い、意欲を維持・向上させる意義が認められる。

今回、我々は大きな障がいを有しているにもかかわらず、積極的に理学療法に取り組む腕神経叢引き抜き損傷の40歳代男性入院患者を経験した。40歳代男性とは、家族や会社等から熱心に働くことを期待され、ライフステージにおいては子育ての時期と重なり、家庭と仕事を両立させなければならない大切な時期にあたる。つまり、本患者は働き盛りの年齢層にあるということができ、本患者の理学療法への取り組みに対する意欲を探求できれば、同じく働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を向上させるための知見が得られると考える。意欲は個々の患者で構成される要因や立ち現れ方は異なり、同じ背景や障がいを有する患者をいくら多く集めても有効な知見を得られるとは限らない。しかし、その一方で、たとえ一事例であっても、理学療法への取り組みに対する意欲を構成する要因やその生成過程、また立ち現れ方を深く探求することができれば、同じ背景や障がいを有する患者に有効な知見を得られる可能性は高い。それゆえ、一事例からでも、できるだけ多くの知見を集約しておくことが必要であり、知見をどのように活用するかと併せて言及しておくことが必要になると考えられる。

本研究の目的

理学療法に積極的に取り組んでいる腕神経叢引き抜き損傷を有する40歳代の男性入院患者の理学療法への取り組みに対する意欲を探求し、そこから障がいを有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲の向上に関する知

見を得ることである。

用語の定義

「患者の理学療法への取り組みに対する意欲」とは、臨床でいうところの「患者が、身体機能や日常生活動作の回復を目指し、積極的に理学療法へ取り組んでいる状態や姿勢」を指している。これを現場の理学療法士からみると、患者は現在の状況を受け入れながら、憂さに沈むことなく、ひたすら理学療法治療プログラムに取り組んでいる状態に映る。本研究では、この状態を「患者の理学療法への取り組みに対する意欲」として捉えることにする。

対象と方法

対象

対象は、回復期リハビリテーション病棟に入院し、理学療法に積極的かつ意欲的に取り組んでいる40歳代の男性患者とした。本患者は肉体労働に従事しており、就労中に左上肢をベルトコンベアに巻き込まれ、左腕神経叢引き抜き損傷と脊髄損傷、左上腕骨および前腕骨骨折を受傷した。

調査時は、受傷後約2ヵ月が経過しており、医学的情報としては、左上肢機能は全廃、重度の疼痛を呈していた。また左下肢に知覚障害は認められなかったが、中等度の筋力低下を認めた。右上下肢には筋力低下は認められなかったが、右体幹から下肢全域の温痛覚が重度鈍麻であった。日常生活活動は入浴以外車椅子にて自立していたが、理学療法では杖歩行や独歩練習を行っており、杖歩行の自立が目前であった。社会的情報としては、妻と子ども3人の5人暮らしであり、妻は仕事と家事を両立させながら毎日見舞いに来ていた。仕事については肉体労働に従事していたために、今後は職場内での配置転換を予定していた。

方法

方法は、解釈学的現象学的分析を用いた。解釈学的現象学的分析とは、心理学の分野で発展してきた質的研究法であり、当事者の心理的世界を洞察することで、個人の経験の質と特徴を深く理解する分析手法である¹²⁾。

質的研究では様々な分析手法が活用されるが、グラウンデッド・セオリーや会話分析、ライフストーリー研究、K-J法等はもとをたどると社会学

や人類学等の研究方法として開発されたものである。その一方で、解釈学的現象学的分析は、起源的には心理学との親和性が高いという特徴をもっており¹³⁾、個人の心理的世界を洞察するためにデザインされている心理学的な質的研究方法といえる。主に、個人的な経験の質と特徴をより深く理解すること、つまり現象の性質や本質を明らかにすることを目的にしている¹²⁾。理学療法領域では本手法を用いた報告は見受けられないが、看護の領域では、手術を受けた肺がん患者の術後早期の身体経験¹⁴⁾や、脳血管障害からの回復過程における患者の身体経験¹⁵⁾、更年期を迎えた女性の月経に対する認識¹⁶⁾等の解釈に活用され、有効な知見が示唆されてきた。よって、本研究の目的である本患者の理学療法への取り組みに対する意欲を探求することに最も適した分析手法であると考えられる。

具体的手順としては、2017年7月某日、17時から19時までの約120分間にわたって、半構造化面接を一回、当院リハビリテーション科の面談室にて行った。なお、本患者への心身等への負担を考慮し、インタビューは一回のみとしたが、詳細で豊かな語りを引き出すため時間をかけてインタビューを行うことにした。インタビュー者は本患者の担当理学療法士であり、当院回復期リハビリテーション病棟への転院後から約2ヵ月間継続して関わっており、内面を深く探求するうえでの友好的関係性を保つことができていた。

インタビューでは、主に、理学療法を積極的かつ意欲的に取り組める理由について語ってもらった。その際には、本患者の語りを妨げないように注意し、詳細で豊かな内容を引き出すように努めた。また、その内容については本患者の許可を得てICレコーダーに録音し、録音したデータについては、文字に起こし、テキストデータに変換し、逐語録としてまとめた。なお、データは文字に起こす段階で匿名化した。

次に、分析については、C.ウィリッグ¹²⁾の手順を参考にした。最初に逐語録を何度も繰り返し読むことで全体的な印象を掴み、理学療法への取り組みに対する意欲という関心のもと、興味深い部分を「抜粋した語り」として抽出した。そして「抜粋した語り」を文脈から《サブテーマ》としてラベル付けし、相互に関連のある《サブテーマ》を【テーマ】としてまとめた。その後、【テ

マ】ごとに、《サブテーマ》における「抜粋された語り」を示しながら、その解釈を行い記載した。なお、解釈の信頼性と妥当性を高めるため、20年以上の理学療法経験を有し、研究に精通した研究者1名にも「抜粋した語り」《サブテーマ》【テーマ】を確認し分析を進めた。

倫理的配慮については、所属施設の倫理委員会の承認を得て行った。本患者に対しては、研究の概要、目的、守秘義務、参加への任意性、中断の自由、研究結果の公表の仕方について文章および

口頭にて説明し、書面にて研究への同意書を得たうえで実施した。

結果

本患者の語りからは、9つのテーマと18のサブテーマが抽出された。これらをTable 1に示す。以下に【テーマ】ごとに、《サブテーマ》と「抜粋された語り」を示しながら、その解釈を記載する。なお、テーマは【 】で、サブテーマは《 》で、そして抜粋した語りは「 」で示した。

Table 1. Motivation of a patient with traction lesion of the brachial plexus actively working on physical therapy

Theme	Subtheme
【The realization that motivation to have physical therapy (PT) can be maintained as long as the period is limited to only six months】	《The realization that motivation to have PT can be maintained as long as the period is limited to only six months》
【The ability to change impatience, present medical condition and pain into motivation to recover his physical function】	《Try to maintain the maximum effort even when accepting a slight improvement in physical recovery》 《Take impatience positively not negatively》 《Strive to do as much as possible to avoid mental distress with excretion assistance》
【The presence of his family to make him feel self-confident】	《The presence of his family to make him feel self-confident》
【Two different attitudes to wife: not depending on wife's support and getting energy from wife】	《Two different attitudes to wife: not depending on wife's support and getting energy from wife》
【Pride as father, the head of a family and a man】	《Pride as a father watching over children's growth》 《Concern for family members as the head of a family》 《A will to work urged by pride as a man》
【Conflicting emotions: desire to return to work and anxiety resulting from changes in role after returning to work】	《Desire to return to work, all the situations considered in the workplace》 《Anxiety about the changes in roles after returning to work》
【The ability to drive himself to rehabilitation monitoring physical fatigue to maintain effort】	《Monitor the degree of self effort through physical fatigue》 《Determination to drive himself to the situation with someone watching during rehabilitation with aware negligence of his duties with noone watching》
【Swayed emotion by information from received from the medical staff】	《Motivation for PT affected by the doctor's opinion telling the chance of getting cured》 《Wish to leave hospital earlier than the goal data settled by the medical staff》
【Motivation and mood for having PT influenced by the people involved in his hospitalization: therapists, the inpatients of his ward and friends visiting him】	《Shut out the problem of the ward with negative atmosphere in order to maintain motivation for PT》 《Adjust the motivation for PT that can change according to how he is compatible with a physical therapist》 《Wish to return the favor of friends and neighbors visiting on him in hospital》

※ theme is 【 】, subtheme is 《 》

1) 【半年限定で理学療法への取り組みに対する意欲が維持できるという認識】

(1) 《半年限定で理学療法への取り組みに対する意欲が維持できるという認識》

本患者は、入院から約二ヵ月間の理学療法への取り組みから、それに対する意欲は半年間維持できると語っており、《半年限定で理学療法への取り組みに対する意欲が維持できるという認識》を有していると解釈できた。また、作業療法および自主トレーニングも含め、一日5時間程度なら努力はできるが、それ以上はできないというように、時間的な限定についても語っており、意欲は時間的に限定的であることが示唆された。

「まあまあ2・3週間...2年とか言われたらげーでるけど。半年、本間正直半年までやったら、モチベーション的にはいけると思う。4時間やったら(患者は自主トレーニングを含めて一日4時間の訓練を実施している)。一日4時間って決まってるやんか。これをそのまま、朝から晩までやって、まあまあ言うたら土日もやってるやんか。それは全然日曜日休みくれとも思わへんし。なんなら5時間くらいやったらいけるかなーくらいかな。筋トレが別やったとしても、何かしらこうやることあるんであれば。ちょっとだけ、だから、こう向こうでやってる、こう滑らすんだけど(作業療法で取り組んでいるサンディング)、30分やって休憩したらそれだけでも、って言うんであれば、やるし。そうそう、出来る範囲は。そんなんで半年まではいけるから、変わらんのちゃうかな、今の気持ちでは、やで。」

「いやー無理。半年っていうのはリミットやと思うわ。多分な、半年っていうても、おれのなかでは半年はないと思うねんで。半年やったら辛抱できると思ってるねんけど。」

2) 【焦り、病状、苦痛を、理学療法への取り組みに対する意欲に変化させる力】

(1) 《回復の伸びしろのなさを受け止め、最大限の努力を維持しようとしている》

本患者は、歩行能力の回復が停滞してきている状況から、回復の伸びしろのなさや回復に時間がかかることを認識していた。つまり、《回復の伸びしろのなさを受け止め、最大限の努力を維持しようとしている》ことを自覚し、理学療法を継続する必要性を改めて認識していると解釈することができた。

「せやけど思ってる以上に筋力もついてないし、プルプル感はとれへんし、ずーっと頭打ちやんか、(リハビリ室)5周で。今までやったら順調にいったやんか。歩き始めて、歩けるようになりましたね、で。そっからの伸びしろがないなと思って。もっと筋トレやって、ふりだしに戻ってるからな。あーこりや長なるなっていうのはちょっとうす頭の中であるけど、先生もどれくらいって言われへんやろうし。(中略)それはだから続けんとあかんから、置いてもらってる状況に、自分を追い込む...ただ、先が今んとこまた見えなくなってる。」

(2) 《焦りを否定的ではなく、肯定的に捉える》

本患者は、「焦り」は人の心を折ることがあると考えていたが、それは個々人の捉え方で違うことを指摘し、自分の場合には、自分自身を追い込み、頑張るための一つの肯定的な要因になっていることを訴えていた。つまり、本患者は、《焦りを否定的ではなく、肯定的に捉える》ようにしていると解釈することができた。

「自分にとってはプラス思考的な焦りがあるから、頑張れる、追い込まれてる感があるからの。焦りがないとやってへんし多分。逆に。のんびりしよーと。焦りがあるから頑張ってるし、お金に対しても、そうそうそう。それは人の考えようやんか。それがプレッシャーになってこう折れるやつもおるやろうけど、心が。それは全然ない。図太い系、心臓に毛がはえてるから。」

(3) 《排便などを介助されて生活する精神的苦痛を避けるために努力する》

本患者は、人に介助してもらうことに嫌悪を感じていた。これは過去に排便を介助された経験時の精神的苦痛からきていると感じられた。そのため、本患者は《排便などを介助されて生活する精神的苦痛を避けるために努力する》ということ強く認識していると解釈できた。

「おれはなんていうか、人にやってもらうのが究極いややねん。だから、おむつを他人に、じゃないけど、一番悪い...こんなこというのは汚い話やけど、大。オムツの中で、触られてる以前に、出てる感のある自分の情けなさ。それをまた、それをやったら、努力したら出来るっていうのを、言うたら自分で便器をさすやつとかあるやんか。何でもあるし。移ってその、部屋越しに簡易のやつ。それでも出来るようになるって100%じゃな

くても、何%でもあるんやったら、それは努力する。」

3) 【家族の存在によって強気な自分を維持できる】

(1) 《家族の存在によって強気な自分を維持できる》

本患者は、退院後に家族がいない状況を想像することで、家族の存在を再認識しており、そこから、あらためて《家族の存在によって強気な自分を維持できる》ことを認識していると解釈できた。

「意欲？あーこれからでていくぞ、と。回復するために自分が振り切る…こう、なんていうの、その、いや、エネルギーの源ってことやな。そりゃまー家族やな、今の現状では。」

「やっぱり家族がおるからこんな強気でおるけど、こんなもん一人で退院して、一人やってみーや、うわーと思うけどな。」

4) 【妻の努力に依存しない自分、妻からエネルギーをもらう自分という二つの自分】

(1) 《妻の努力に依存しない自分、妻からエネルギーをもらう自分という二つの自分》

本患者は、若い頃に人に裏切られた経験を有しており、これにより大きく落ち込んだ経験を有していた。こうした経験から人に何かを期待しないようにするようになっていた。これは妻に対しても同様であると思われた。しかしながら、その一方で、妻の見舞い等には深く感謝を示しており、そこからエネルギーをもらっていることを語っていた。つまり、本患者は、《妻の努力に依存しない自分、妻からエネルギーをもらう自分という二つの自分》を認識していると解釈することができた。

（奥さんが熱心に色々（毎日の見舞いや、持ち込み食を作ってくれること）やってくれなかったら、そこ（意欲）って変わりますか？）「あーいやそれはない、おれは元々、色んな面に対して、人には期待してない。期待して裏切られた時は、もうがくと落ち込むやんか。そういうのはまあ若い頃色々経験したけど、そんなんもってたら、落ち込むのがいややから、そんなん全然思ってない。やってくれてありがとうぐらい。（中略）そうやなまーほんま、精神的にっていうんではないけど、やってくれてることがすごすぎるから、逆にはよ帰って。嫁さんからしたら、逆にエンジンかけてもうてんねん、おれを。早く戻って、は

よ仕事いったらなって。」

5) 【父親、主人、男としてのプライド】

(1) 《子どもの成長を見守る父親としてのプライド》

本患者は、子どもを成人まで養育することは、父親の最低限の役割と認識しており、子どもが大学に通いたいと強く思うなら、父親として経済的に学費を工面してやりたいと考えていた。つまり、学費の工面は父親としての役割ととらえており、ここに《子どもの成長を見守る父親としてのプライド》があると解釈することができた。

「子どものために、最低限、嫁のためにじゃなくて、最低限子どもは、まー成人まではする。せなあかんやんか、親として。いうたらまあまあいうたら、そんな金持ち…普通でもないけど、言うたように大学は…冗談やで、奨学金でいけよ、とか、最低限やったらなあかんけど、できたら、そこまで煽っててやらなかったらしゃーないけど、それくらいの気でやってくれたら、払った気にはなるやんか。（中略）それは傍から見て、再婚してやりっぱなしの父親では…。プライドやな。どっちか言うて。まあまあ、子どもはかわいいで。せやけど、最低限の事はせんと、周りから陰口たたかれるってのも嫌やし。」

(2) 《主人として家庭を思いやる気持ち》

本患者は、今後、献身的に見舞う妻が倒れてしまい家庭が崩壊するようときには、杖歩行でも復職するという覚悟を有しており、常に早期社会復帰する気持ちも有していた。ここには、《主人として家庭を思いやる気持ち》が表れており、身体の回復よりも家庭を優先したいという強い思いがあると解釈することができた。

「そこまてなったら（自身の入院によって妻が疲れきってしまう）、もういる以上は、それが続けてしまうのであれば。退院するかもしれん。ある程度で。妥協して。まあこの状況でか、ここかはわからんけど、もうちょっと経ってほぼほ歩ける、杖くらいやったら、もしかしたら、車だけ運転して、事務所も杖でいけんことないし、ただ座ってるだけやから、可能性はある。嫁さんが倒れたとかなったら、いる以上頑張ってしまう性格なんは分かってるから、退院すると思う。無理にでも。もうええわっていうて。ごめんやけどっていうて。（中略）優先事項やな。それによって家庭もサイクルばらばらになるし、親に手伝わても

らったり色々な事してもらうくらいやったら。ここまできてから、もうある程度、ここまで来てないけど、まあまあ杖でどうにかなるやろってイメージがあるから、今やったらな。」

(3) 《男のプライドからくる働きたいという思い》

本患者は、左上肢に重度の疼痛があるため、仕事に行けない日があることを想定していた。そのため、妻は自分が働くことを提案したが、本患者は、《男のプライドからくる働きたいという思い》があり、妻には働いて欲しくないという思いがあると解釈することができた。

「だから痛い時はすいません、今日は何も出来ませんっていうのをもう説明してから出社してしまう。もう労災が効かなくなったり、保険がおりなくなったりしたら、まあ嫁さんはそんな無くなったら私が働くやんっていうけど、ここまでやってくれてまだ働いてとは100%…おれは、そやから、極論で言うたら、働いて欲しくはないわけや。働かんでええっていうのが男のプライドじゃないけど、そやけど嫁さんは家にずっといるのは嫌やから、って言うて働いてくれてんねんけど。それは言い訳かもしれへんやんか。」

6) 【職場復帰への意欲と、復帰後への不安から生じる葛藤】

(1) 《職場の状況を考えて、早く復帰したいという思い》

本患者の職場は、少ない人数で業務を回しており、本患者が休んでいることで他部署の人に協力してもらう必要に迫られていた。そのため、本患者は職場に迷惑をかけていると感じており、どこまで自分が働けるか分からないが《職場の状況を考えて、早く復帰したいという思い》を内面に抱えていると解釈できた。

「まあ、元々仕事に対してもまあまあ迷惑かけてるから、まあ、だから、まあ、おれ家族っていうか、迷惑かけたな…っていうのはある。」

「今、まあ言うたら、現状で、会社の状況もあるねんやんか。元々人数ギリギリのとこやねんやんか。募集してもけへんねん。それやのに、今でも言うたら後輩…若い子とか会社休みまくってるから、そんな聞いたら、たとえ何出来るわけちゃうけど。今もう、色々な人が入れ替わり立ち代わりで協力して、部がちゃう人がやで。で、なんとか仕事を回してる状態やから。そうそうそうそう。」

(2) 《職場復帰後の役割の変化からくる不安》

本患者は、職場復帰後は配置転換によって慣れないパソコン業務に従事する必要があったが、過去に自分と同様の事故を経験した人が、職場復帰後に職場で冷遇されている現実を知っていた。そのため、自分もそうなると感じ、不安を有していた。こうしたことから、本患者は、《職場復帰後の役割の変化からくる不安》を深く抱いていると解釈することができた。

「(自分のように仕事に事故をした経験のある人が) 実際戻ってきた時に、窓際族的な扱いして、自然と辞めさせていって、あとから訴えるってやつが半分くらいいてるって。せやけどおれは、それに関しては、自分が信じてんねんから。そうやったらしゃない、見る目がなかったと思って。それでも15万でも、雇ってもらわなしゃないやん。この体で15万くれるところなんか。パソコン出来るわけじゃないし。ブライントッチなんかできへんしな、ぴっぽっば、からはじめて。頭良かったらな、ネットで商売出来るとか、自営で出来るんやったらええけど。雇ってくれるところはまずないやん。」

7) 【努力を維持するために、自分をモニタリングし、追い込む力】

(1) 《自己の努力の程度を、疲れを通してモニタリングしている》

本患者は、朝と昼のテレビドラマの視聴時にそのまま寝てしまうほど疲労することが多かった。ここから、自分は努力していると認識している様子であった。つまり、本患者は、《自己の努力の程度を、疲れを通してモニタリングしている》と解釈できる状況であった。

「いやいやいや、おれこんな疲れてるんやって。それまでは絶対テレビつけて、とかしとったけど、今多分、朝と昼間で見てる、まあ、ドラマは見るかな。無理してでも。(中略) そうそう、寝落ちをしてしまうんやないかなあ、と。それくらい疲れているんやったら、自分の中では御の字かな、と。やってる以上は。」

(2) 《自分一人では努力出来ないことを自覚し、追い込むために誰かが見ている環境に自ら向かう》

本患者は、自主トレーニングの必要性を理解しながら、一人で取り組んでも張り合いがなく、追い込むほど努力できないとしていた。しかし、その一方で、誰かが自分を見ている状況下では頑張

れると認識していた。そのため、努力できるように誰かがいる環境へと自ら向かうようにしていると感じられた。つまり、本患者は、「自分一人では努力出来ないことを自覚し、追い込むために誰かが見ている環境に自ら向かう」ということを認識し、行動していると解釈することができた。

「そこまで限界まで追い込んでない。いやーいうたらもう、人任せなんやろな。こんなん思ってたのは。やる気はあんねんで、やれっていわれたら、やんねんけど。人に見られてて、これやりましょって、うんうんってやんねんけど。一人ではぼかーんとしてやっといってくださいねって言われても、なんとなーくやんねんけど、疲れたらやめて。なんか張り合いがない。(中略)(自主トレーニングを)自分でやったら良くなるって分かってんねんで。それはこっち、部屋でやってるやつを、うそでもこうやってたら、例えなんぼかでも、二割か知らんけど、二割…一割ってことはないやんか。同じことをずっとやってたらやで、休憩しながらでも、膝・腿上げでも、やってたらもっと早く良くなってたと思うけど、それは分かっててもそれは出来ない。なんか…なんかやる気はおきひんな。分かってんねんで、頭では。そやけど、そこまでは…なんていうんかな…努力家ではないんやろな。実際問題は早く退院したい気持ちはあんねんで、ただだから、煽ってって人には言う。だから、誰かずっとおって、じゃないけど、もっともって追い込んでくれって。(中略)だからほんまに、Oさん(担当作業療法士)が言うように、早めに来てもらって自主トレしてもらうかなって。それは十分やって欲しい。呼んでもらって、ちょっと横目でも見られてるかなって。人が、いうたら、おばあちゃんでも、喋りながらでも、人がやってたら、自分も最低限これくらいはしながらもって。」

8)【医療スタッフからの情報により、ゆらぐ思い】

(1)《医者から言われた治る確率に左右される、理学療法への取り組みに対する意欲》

本患者は、医師より上肢の回復の見込みが2%と説明を受け、回復に向かうイメージを持つことができずに治療の中断を選択した。このように回復の見込みが極端に低い場合には、理学療法への取り組みに対する意欲がでないことを経験していた。つまり、「医者から言われた治る確率に左右される、理学療法への取り組みに対する意欲」

を認識していると解釈できた。

「(治る確率が)それは1%ではせーへんかな。それは絶対するって…自分の努力次第って言われるんやったら、する。ただ、それが、いや、何%って言われてもわからんわ、おれ。いうたら、この鏡のやつに(ミラーセラピー)2%位って言われたときは、せーへんって言うた。やってて自分でうーんって、やってて、(上肢が)動かへんのが目に見えてるわけやんか。」

(2)《医療スタッフの設定したゴールよりも早く治そうとする思い》

本患者には、医療スタッフから提示される情報から、医療スタッフが想定する時期よりも早く治すために理学療法に取り組もうとしていた。つまり、「医療スタッフの設定したゴールよりも早く治そうとする思い」を強く有していると解釈できた。

「大体、おれは思い込みではなく、先生らの人の話を聞いて、大体のこれくらいは頑張ったらいけるな、と。で、先生らが思ってるよりも早く退院したろって頭があるから、8月くらいなだけで、もうだからそれがおれの簡単な思い込みで、でもほんまは、でもそっからスタートなんですよかもしれんけど。」

9)【理学療法士、病棟内、友人との関係性から構成される理学療法への取り組みに対する意欲や思い】

(1)《負の影響を与える病棟の雰囲気、理学療法への取り組みに対する意欲を維持するために自分の中でシャットダウンする》

本患者の病棟生活では、同室の高齢患者の喧嘩や看護師への執拗なクレーム等がみられていた。しかし、本患者は、高齢であることを理由にどこかで仕方ないと考えるようになっていた。つまり、本患者は、「負の影響を与える病棟の雰囲気を、理学療法への取り組みに対する意欲を維持するために自分の中でシャットダウンする」ことで、心理的に安定させていると解釈することができた。

「それ(部屋の雰囲気は)は勝手にシャットダウンしてる、もう。いや、もっとフレンドリーやったらフレンドリーでええねんで。もういうたらIさん(同室患者)?まあこんなこともええんか、録音で。喧嘩しだしたりすんねんで。ロッカーを開けただの…もうええから、眠たいのにな。それをやりだしたり、看護師さんにIさんが永遠い

うてるねん、クレームを。おれのなかで...ちよつとぼけてはるんかな、ちゃうんかな、それもあるんやろうけど『さむいんじゃー』とか『襖はなんでなくなったんじゃー』とか、永遠言うてはるねんやんか。(中略)それはもうシャットダウン。そうそう、年取ったらこんなもんやな、と。」

(2) 《理学療法士との相性によって変化する、理学療法への取り組みに対する意欲を調整する》

本患者は、理学療法場面では理学療法士と会話がないことに耐えられないとしており、自ら積極的に会話し、明るい雰囲気になるよう努めていた。また、相性が合わない理学療法士に対しても自ら合わせる努力をしていた。つまり、本患者は《理学療法士との相性によって変化する理学療法への取り組みに対する意欲を調整する》ということを行っているとして解釈することができた。

「そりゃ性格が合う合わへんもあるやろうし、先生と。合わへん...まあまあ、合わせていくけど、おれも。へんこのやつもおると思うねんやんか。

(中略)それは自分でそういう雰囲気をもってってたかもしれんな。もっと明るくなるように、自分のやってる時間はやで。冗談言っても、反応さぐりさぐりやけど、そんなんもう、黙々とだけは耐えられへん。時間がもてへんわ、まあ。普段あんま喋りじゃないねんで。もうここでリハビリ中は喋ってらんと、時間が経つんが耐えられへんと思うわ。やってるときも忘れてる、やってることを忘れてるくらいに喋っとかんと。もうリアルにやってたらめげてるなあ。」

(3) 《友達や近所の人のお見舞いや親切さに応えたいという思い》

本患者は、面会に来てくれる友人や、妻が見舞いに訪れやすいように夕食を作ってくれる近所の人に感謝し、その気持ちに応えたいと思っていた。このように本患者には、《友達や近所の人のお見舞いや親切さに応えたいという思い》があると解釈することができた。

「まあまああるんとすれば、自分の周りに対してもあるやろし、まあ面会来てくれたり、嫁さんに対して、来てるから友達近所めっちゃ友達してるから。ばんばん今日でもカレー作って、金曜の晩に作っておいてくれてたり。なら、仕事終わってすぐ来れるやん。それがあから、その分を、そうやそうや。もうほんま感謝やけど。お見舞いきてくれて、お見舞い来てくれた分返さなあかん

けどな。そうそうそう、冗談でおれの人徳や言うてるけど。」

以上、これら9つの【テーマ】とその解釈を踏まえ、本患者の理学療法への取り組みに対する意欲がどのように立ち現れていたかを以下に示した。

本患者の理学療法への取り組みに対する意欲の立ち現れ方

本患者の理学療法への取り組みに対する意欲は、患者自身の【半年限定で理学療法への取り組みに対する意欲が維持できるという認識】のもと、【焦り、病状、苦痛を、理学療法への取り組みに対する意欲に変化させる力】によって生成されていた。そして、家族との関係性からは、【家族の存在によって強気な自分を維持できる】ことや【妻の努力に依存しない自分、妻からエネルギーをもらう自分という二つの自分】、【父親、主人、男としてのプライド】を強く認識し、職場復帰に対するものからは、【職場復帰への意欲と、復帰後への不安から生じる葛藤】を強く認識し、理学療法への取り組みに対する意欲を補強していた。また、患者自身は【努力を維持するために、自分をモニタリングし、追い込む力】によって自己管理を行い、トレーニングを継続したり、入院という環境から【医療スタッフからの情報により、ゆらぐ思い】や【理学療法士、病棟内、友人との関係性から構成される理学療法への取り組みに対する意欲や思い】を経験し、自分なりに思いを整理し、理学療法への取り組みに対する意欲を補強していると解釈することができた。

考察

働き盛りの者が大きな障がいをもったとき、理学療法への取り組みに対する意欲を維持・向上させることは、生活や職業復帰において非常に大切なことになる。本研究では、障がいをもった働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲の維持・向上に関する知見を得るため、本患者の理学療法への取り組みに対する意欲という個人的経験を、解釈学的現象学的分析を用いて解釈した。その結果、9つのテーマからなる構造をもとに、本患者の理学療法への取り組みに対する意欲が立ち現れていることが示唆された。これによ

り今回、大きな障害を有している患者が積極的に理学療法に取り組んでいるとの認識を得たといえる。

具体的には、本患者の理学療法への取り組みに対する意欲は、患者自身が意欲は限られた期限のなかでしか維持・向上できないことを認識したうえで、否定的な経験等から本意欲を生成していると考えられた。そして、家族との関係性からは妻や家族の長としての責任等から様々なエネルギーをもらい、そのなかで本意欲をかりたてているとも考えられた。また、理学療法経験を通して自分の弱さを自覚し、そのなかで努力を維持するために自らを追い込むこともしていた。また、職場復帰に対する意欲や不安を同時に抱えるという経験や、入院環境の中の様々な経験を通して、本意欲を補強していると考えることができた。

したがって、これら9つのテーマからなる解釈をもとにした評価やケア、支援、工夫等を行うことができれば、働き盛りの障がいをもった患者の理学療法への取り組みに対する意欲を積極的に維持・向上させていくことが可能になると考えられる。

そこで以下に、本患者の理学療法への取り組みに対する意欲を形成している9つのテーマごとに評価やケア、支援、工夫等を考察し、総合的な支援方法について提案する。

1) 【半年限定で理学療法への取り組みに対する意欲が維持できるという認識】

先行研究では、一般病院の65歳以上の入院患者では在院日数が長いほど、日常生活動作に関連した意欲は低下することが報告され¹⁷⁾、日常生活動作に関連した意欲と在院日数との負の関係性が報告されている。

しかし今回、本患者の理学療法への取り組みに対する意欲については、結果から一定の期間しか維持・向上させることができないと解釈することができた。つまり、理学療法への取り組みに対する意欲は常に維持・向上できるものではなく、有効期限があるものと考えられる。そのため、理学療法への取り組みに対する意欲を維持・向上させるためには、個々の患者ごとの有効期限を考え、適切な時期に介入することが大切になると思われた。また、有効期限を延ばすような工夫等も必要になっていくと思われる。

2) 【焦り、病状、苦痛を、理学療法への取り組み

に対する意欲に変化させる力】

本患者は、焦りや病状、排便の介助による精神的な苦痛という否定的な要因を、理学療法への取り組みに対する意欲に変化させており、そこから本患者は、否定的な要因を意欲に変化させる力を有していると考えられた。障がいを有した働き盛りの患者すべてが否定的な要因を意欲へ変化させる力を有しているとは思わないが、こうした力を有する患者がいることを理解しておく必要がある。その一方で、否定的な要因を意欲に変化させる力を有さない患者に対しては、回復が停滞している時期等には心理的負担を軽減することが必要になると思われた。また、今後は、否定的な要因を意欲に変化させる力を育む介入方法も開発する必要があると考えられた。

3) 【家族の存在によって強気な自分を維持できる】

脳卒中後遺症の中途障がい者を対象とした先行研究¹⁸⁾では、受傷あるいは受傷による経済的低下が離婚の可能性を高めると報告されており、障がいを有した後の家族関係の維持の難しさが示されている。本患者においては、家族は理学療法への取り組みに対する意欲の維持・向上に大切な存在であった。このことから、家族を持つ障がいを有した働き盛りの患者においては、家族との関係性を維持するケアや支援が特に大切になっていくと考えられた。具体的には、ソーシャルワーカー等と連携し、退院後の生活や経済的な見通しを立てながら、患者と家族の関係性が崩れないような調整等が必要になると思われた。

4) 【妻の努力に依存しない自分、妻からエネルギーをもらう自分という二つの自分】

本患者の中には、妻に依存しない自分と妻の熱心な関わりから力をもらう自分が併存しており、妻の存在が理学療法への取り組みに対する意欲に大きく影響していると考えられた。ここから障がいを有した働き盛りの患者に妻がいる場合には、妻のニーズや心身のストレスを考慮し、患者と妻との関係性を評価し、家族同様にその関係性を維持するケアや支援を行っていくことが必要になると考えられた。

5) 【父親、主人、男としてのプライド】

本患者は父親、主人、男という役割がプライドとなり、理学療法への取り組みに対する意欲の向上に寄与していると解釈することができた。ここからは、働き盛りの障がいを有する患者の理学療

法への取り組みに対する意欲を維持・向上させるためには、できるだけ多くの役割や責任等を維持、再獲得することが大切になると考えられた。

しかし、その一方で、責任感やプライドが大きすぎると心理的負担につながる場合もあるため、そのような患者に対しては、役割や責任等が心理的負担になっていないかを評価し、必要に応じたサポートを行い、心理的負担の軽減を図ることが大切になると考えられた。

6) 【職場復帰への意欲と、復帰後への不安から生じる葛藤】

本患者は、職場復帰を果たしたいという意欲と職場復帰に対する不安の間で葛藤していた。池田ら¹⁹⁾はストーマ造設と大腿骨骨頭切除術を施行したがんサバイバー40歳代の男性の体験を探究し、仕事復帰の方法や道程をいくつか提案できるようにしておくことがケアとして重要になると説いている。

今回の結果からは、職場復帰を目指す働き盛りの障がいをもつ患者に対しては、職場復帰に至るまでの支援に加え、復帰後にも安心して働けるように職場への働きかけを行うといった支援等が必要になると考えられた。

7) 【努力を維持するために、自分をモニタリングし、追い込む力】

本患者は、疲労を指標に自身の努力を測り、理学療法への取り組みに対する意欲を向上させていた。一般的に理学療法では疲労の軽減を目指すのが、本患者のように疲労を努力の指標にしている場合には、疲労をコントロールすることで理学療法への取り組みに対する意欲の維持・向上をコントロールすることができるという新たな視点が提示できた。

また、本患者は他者から見られることで努力ができるとしていたが、反対に他者から見られたくないと思う者もいるため、個々の患者に合わせて実践していくことが大切になると思われた。環境と理学療法への取り組みに対する意欲の関係性の解明は、今後の課題になると考えられた。

8) 【医療スタッフからの情報により、ゆらぐ思い】

佐々木ら²⁰⁾は、医師の説明内容と患者の受け止め方には差異があるため、患者の年齢等を考慮した関わりを持つ必要性があると説いている。本患者の場合には、医療スタッフの情報により理学療法への取り組みに対する意欲を変化させており、

本意欲を向上させるためには、情報の伝え方について患者個々の受け止め方まで理解して行う必要があると考えられた。特に、回復の見込みが低い場合には情報提供の仕方、理学療法への取り組みに対する意欲が低下してしまう可能性が大きいので、患者への情報提供は慎重に行う必要があると考えられた。

9) 【理学療法士、病棟内、友人との関係性から構成される理学療法への取り組みに対する意欲や思い】

本患者からは、病棟内での他患や理学療法士、友人との関係性が理学療法への取り組みに対する意欲に影響することが示唆された。ここから理学療法への取り組みに対する意欲は、患者自身の問題だけでなく、周囲との関係性からも大きく影響を受けることが示唆された。

回復期リハビリテーション病棟の入院患者は、高齢者が占める割合が多いため²¹⁾、本患者のように働き盛りの患者においては、高齢患者の行動がストレスになりうる可能性は小さくない。そのため、病棟スタッフと協力して、同室患者との関係性等を評価し、良好な関係性を保つことが大切になると考えられた。また、本患者は理学療法士から声かけがない状況でも理学療法への取り組みに対する意欲が低下しないように、自ら理学療法士へ声かけを行い関係性の構築に努めていた。本患者は自ら声かけができるタイプであったが、これができないタイプの場合には、理学療法士から積極的に声かけを行い関係性を構築する努力が必要であり、また、患者が声かけをしやすいような雰囲気等を作っておくことも大切になると考えられた。さらには、友人等との関係性を維持するためには、入院中に面会しやすい環境を整える等の支援等が必要であると考えられた。

以上、各テーマから働き盛りの障がいをもつ患者に対して、理学療法への取り組みに対する意欲を向上させるための新たな視点や必要となる評価やケア、支援方法の一部を示すことができたと考えられる。

これらを踏まえ、働き盛りの障害を有した患者の意欲の維持・向上を図るための支援方法を総括する。理学療法への取り組みに対する意欲は、限られた期限内で維持・向上できることを患者と理学療法士が共有することが大切であり、そのうえで、患者自身に内在する苦難等を意欲にかえる力の程度を評価し、それに合わせた支援が必要となる。

次に、家族との関係性や経済状況等の把握、または職場復帰の可能性やそれに対する不安等の評価を通して、本意欲の維持・向上に寄与できる事柄（社会保障の紹介や職場環境の整備等）を確認し、生活の再構築を支援していくことが大切となる。続いて、入院中における医療スタッフの言動や入院環境における様々な経験から患者が受けている影響を評価し、それをもとに患者が理学療法に集中できるよう医療者側が関わりを見直すことや、入院環境を整備することが必要になると考えられる。

最後に、今回、本患者が多く直面した問題、たとえば職場復帰や育児、経済的問題は、働き盛りの障がいをもった患者が経験する問題の典型例と考えることができ、本結果から得られた、新たな視点や評価、ケア、支援方法の転用可能性は大きいと考えられ、一定の外的妥当性も担保していると考えられよう。しかしながら、今回のことをもとにしたケアや支援の実践における有効性は今後の課題になると思われた。

本研究の限界と課題

本研究は一症例のインタビューをもとにしているため、すべての働き盛りの障がい患者を網羅していない。また、意欲は社会的な文脈や時間で変化するため、今回の結果は、本患者の一時的な側面を表していると考えられる。これらについては今後の大きな課題にもなる。また、今回のインタビュアーは本症例の内面を深く探求するうえで友好的な関係性を保つことができた反面、担当理学療法士であったがゆえに引き出した語りに偏りがあった可能性は否定できない。しかし、これらについては意欲の質的研究全般にある問題であり、避けられない課題でもあるように思われる。したがって、今後は、結果の知見が有効かどうかを検討していくことが大切になると考えられよう。

意欲やその向上メカニズムの解明は、その多様性から非常に難しいことになるが、一事例から得られた知見の積み重ねが、現場の患者の意欲の向上に貢献していくものと考えられる。

謝辞

本研究を行うにあたり快く承諾していただいた対象者の男性に心より感謝申し上げます。

付記

本論文は、保健医療学学会第8回学術大会（大阪、2017年）において発表したものを修正し、加筆したものである。

文献

- 1) 石垣智也, 泉真里恵, 田中秀憲・他: 回復期リハビリテーション病棟入院患者における入院初期のリハビリテーションへの参加意欲と Functional Independence Measure との関係 —多施設共同研究—. 理学療法科学 29 : 521-525, 2014.
- 2) 木菱由美子, 高橋由美子, 佐々木和人: リハビリテーションにおける患者様への効果的な声かけについて. 専門リハ 3 : 25-29, 2009.
- 3) 喜多一馬, 池田耕二: 理学療法時の意欲を向上させる声かけの言い回しに関する予備的研究—肯定的, 否定的な言い回しの比較—. 理学療法科学 32 : 35-38, 2017.
- 4) Toba K, Nakai R, Akishita M : Vitality index as a useful tool to assess elderly with dementia. Geriatrics and Gerontology International 2 : 23-29, 2002.
- 5) 岡田和悟, 小林祥泰, 青木耕・他: やる気スコアを用いた脳卒中後の意欲低下の評価. 脳卒中 20 : 318-323, 1998.
- 6) Lenze EJ, Munin MC, Quear T, et al. : The Pittsburgh Rehabilitation Participation Scale : reliability and validity of a clinician-rated measure of participation in acute rehabilitation. Arch Phys Med Rehabil 85 : 380-384, 2004.
- 7) 北地雄, 鈴木淳志, 原島宏明・他: 脳卒中後の回復期病棟入院時の身体機能面, 心理・精神的側面, 社会的側面, および Quality of Life の関係 1. 抑うつ症状とアパシー. 理学療法科学 29 : 995-1000, 2014.
- 8) 北地雄, 鈴木淳志, 原島宏明・他: 脳卒中後の回復期病棟入院時の身体機能面, 心理・精神的側面, 社会的側面, および Quality of Life の関係 2. Quality of Life. 理学療法科学 29 : 1017-1022, 2014.

- 9) 北地雄, 鈴木淳志, 原島宏明・他: 脳卒中後の回復期病棟入院時の身体機能面, 心理・精神的側面, 社会的側面, および Quality of Life の関係 3. リハビリテーションに対するモチベーション. 理学療法科学 29: 1023-1026, 2014.
- 10) 岡前暁生, 原田和宏, 岡田誠・他: ショートステイ利用前後における要介護者の ADL と介護者の介護負担の変化. 理学療法学 43: 323-332, 2016.
- 11) 原麻理子, 前田眞治: 脳損傷後の「やる気のなさ」に焦点をあてて. 総合リハ 41: 149-154, 2013.
- 12) C.ウィリッグ: 心理学のための質的研究法入門, pp70-91, 培風館, 2003.
- 13) 神戸早紀, 末武康弘: 質的研究法としての解釈学的現象学的分析 (IPA) の具体的な手続きについて —「解釈学的現象学的分析」(Smith & Osborn, 2004) より—. 心理相談研究 2: 119-132, 2011.
- 14) 大川宣容: 手術を受けた肺がん患者の身体経験 —手術後早期に焦点を当てて—. 日本がん看護学会誌 30: 5-13, 2016.
- 15) 山内典子: 看護を通してみえる 片麻痺を伴う脳血管障害患者の身体経験—発症から 6 週間の期間に焦点を当てて—. 日本看護科学会誌 27: 14-22, 2007.
- 16) 本田知佳子, 我部山キヨ子: 更年期を迎えた女性の月経に対する認識の変化. 日本助産師学会誌 30: 131-140, 2016.
- 17) 相川みつ江, 泉キヨ子, 正源寺美穂: 一般病院に入院中の高齢患者における生活機能の変化に影響する要因. 老年看護学 16: 47-56, 2012.
- 18) 諸橋麻紀: 中途障害者の所得格差が生活に及ぼす影響. 教育福祉研究 10: 101-112, 2004.
- 19) 池田耕二, 山本秀美, 黒田未貴・他: 直腸がんによるストーマ造設と化膿性関節炎による大腿骨骨頭切除を施行したがんサバイバー1人の二つの体験. 理学療法科学 31: 175-180, 2016.
- 20) 佐々木志帆, 林裕子: インフォームドコンセントにおける医師の説明内容と患者の受け止め方の差異. 京都市立病院紀要 37: 50-54, 2017.
- 21) 近藤克則: 回復期リハビリテーション病棟. 総合リハ 32: 305-311, 2004.